

原 著

## ダロウエイ夫人の不安を触発するミス・キルマン

清 水 雅 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 8 年11月20日受理)

### A Pathographical Study of *Mrs Dalloway* : Mrs Dalloway's Anxiety Triggered by Miss Kilman

**Masako SHIMIZU**

*Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Nov. 20, 1996)*

**Key words** : hatred, primary need, depersonalized feeling, moment of being,  
coexistence of sanity and insanity

#### Abstract

This thesis is a pathographical study of Virginia Woolf through her fourth novel, *Mrs Dalloway*. The novel covers one day, beginning in the morning and ending at the party in the evening. The world seen by the sane and insane concurrently in this novel was the one Woolf herself faced throughout her life. Her family had a history of mental disease and she herself suffered from mental disorder. I've chosen to focus on the hatred and hostility between Clarissa and Miss Kilman, her daughter's governess, to reveal Clarissa's abnormalities as manifested by the deep anxiety found in the depths of her being. She is so hypersensitive that she feels anxiety caused by the split of reality and her psychosis. Clarissa's experience is similar to Septimus, a schizophrenic suffering from "depersonalization". At the same time, however, when she enjoys a vivid sensation like "the moment of being", she manages to control her anxiety. These opposing movements toward insanity and sanity continue throughout the novel until they unite in Clarissa's consciousness, when she takes responsibility as a hostess at her party.

Woolf's insight into Clarissa and Miss Kilman is so successful that *Mrs Dalloway* has become identified with the coexistence of insanity and sanity.

## 要 約

Virginia Woolf (1882—1941) にとって書くという客観的な行為は、自らの精神の病を直視し、認識可能な現実の世界と、生存を脅かす非現実という奈落のような深みとの相克から生まれる存在の不安、生の不確実を言語化することであった。本稿では、病跡学的視点に立って、ウルフの長編小説 *Mrs Dalloway* (1925) を、意識の主要な語り手クラリッサ・ダロウエイと、彼女の娘の家庭教師、ミス・キルマンとの間の激しい憎悪感、反目が何から生ずるかを考察する。その結果、両者の嫌悪感・反目は立場の相違や美醜というような表面的ないわゆるコンプレックスや罪悪感から生じるように見えながら、実はもっと存在の深奥に潜む根源的な欲求としての征服欲や独占欲に由来することが明らかとなった。そして、キルマンは、クラリッサに内在する存在の不安を触発し、狂人セプティマスとも共通する精神の異常を顕在化する。ウルフは、*Mrs Dalloway* において、「正常と狂気によって眺められる世界」の言語化を意図したが、クラリッサに「存在の瞬間」を確信させ、意識内でセプティマスの自殺を追体験させることで、正常と異常の微妙なバランス—精神におけるホメオステシス—の可能性を実現したと言える。

## はじめに

「どうして人生はこんなに悲劇的なのだろう。深淵の上にわたされた舗道の一すじのようなものだ。下をのぞくと目がくらくらとする。…いろいろなことがあっても私はとてもしあわせなのだ—ただ、深淵の上にわたされた一すじの舗道という、あの私の感じさえなければ。」(1920.10.25)<sup>1)</sup>とヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) は *Mrs Dalloway* (ダロウエイ夫人：1925)<sup>2)</sup> を執筆前に、日記にこう記している。

この奈落の底のような深淵は、認識可能な舗道を歩く我々が、通常、意識することのない非現実の精神世界を意味する。しかし、その暗い闇の領域を精神を病む<sup>3)</sup>がゆえに、極めて過敏なウルフの目は見ていたと言える。ウルフにとって書くという客観的な行為は、自らの精神の病を直視し、現実の一すじの舗道と生存を脅かす非現実の深みとの相克から生まれる存在の不安、生の不確実を言語化することであった。

したがって、ウルフの作品を考察しようとするれば、精神障害と創造との関係を研究する病跡学的観点<sup>4)</sup>からの読みが不可欠であろうと思われる。特に、ウルフの代表的な第四の長編小説「ダロウエイ夫人」は、ウルフがこの小説に触れて、「私はここで正常な人と、狂人によって眺められる世界」(1922.10.14)<sup>5)</sup>「生と死、正気と狂気

を書きたい」(1923.6)<sup>6)</sup>と日記に書いていることから、そのような視点は重視されるべきであろう。

「ダロウエイ夫人」の舞台は、第一次世界大戦終了後の6月のロンドンであり、午前10時半ごろからダロウエイ夫人、クラリッサが女主人を務めるパーティーの最中の夕刻までの一日が描かれる。登場人物はクラリッサの周辺の人々と、彼女とは全く関係のない人々に大別され、クラリッサと狂人セプティマスの意識描写を主要な軸とし、人々それぞれの意識における過去と現在とが交錯しながら、いわゆる意識の流れという手法で語られる。二つの流れは、小説の終わり近く、パーティーの最中に、狂人セプティマスの自殺が告げられた時、彼女の心の中で一体化する。

ウルフのいう“狂人”とは、紛れもなくセプティマスである。しかし、“正常な人”がウルフの分身と見られるクラリッサであるとは断定しがたい。むしろ、ウルフは異常と正常の境界にあるクラリッサの精神状態を描写することで、クラリッサに「異常を内包しながら正常である人」を実現しようとしたように思われる。

クラリッサの娘、エリザベスの家庭教師であるミス・キルマンは、登場回数は少ないがクラリッサの異常な側面を浮かび上がらせる女性として、決して見逃せない存在である。クラリッ

サはミス・キルマンに強い憎悪の感情をもち、逆にキルマンもクラリッサを憐み、軽蔑する。両者は徹頭徹尾、反感を抱き、反発し、否定しあう。本稿では、何から両者の反目が発しているかを知ることによって、クラリッサの精神病理の一側面を明らかにし、ウルフの精神の病がどのように反映しているかを考察したい。

### (1) クラリッサの不安を触発するキルマンのレインコート

小説の冒頭部で、花を買いにロンドンの街に飛び出したクラリッサは、娘のエリザベスを思い出すとほとんど同時に、家庭教師であるミス・キルマンを想起する。クラリッサの意識に浮かび上がるミス・キルマンは<sup>7)</sup>、「身なりや、人をもてなすことにも関心がなく、緑色のレインコートを着て、無神経な人」であり、「貧民窟に住み、ドイツ系であったため大戦中に学校をやめさせられ、恨みで魂がさびついでしまった人」である。キルマンに対する否定的な評価を集約する表現は、「緑色のレインコート (green mackintosh raincoat)」<sup>8)</sup>であろう。というのは、小説の中盤で、「レインコートを着て、雨傘をもってね」「レインコートを着て、母娘の言うことは何でも聞き耳をたてている」「踊り場の上でレインコートを着て立っている」「教義とか、祈禱とか、レインコートがなぜ大事なのか」とクラリッサがキルマンに触れる度に必ず反復されるからである。

貧乏で、不運で、愛と宗教へ逃避した、決して美しくはないミス・キルマンを固定観念的に表現する「レインコート」は、同時にクラリッサの心的状態を現す重要なキーワードである。キルマンが年がら年中着ている「レインコート」はクラリッサに、「葉の茂る森—魂の奥底—にのめりこみ、枝がめりめりとおれるその音を聞く」と心が激しく焦らだつ」ほど強く、正常から逸脱しているような反応を引き起こす。それは、「彼女の方がどんなに偉くて、わたしがどんなに劣っているか、また、彼女がどれほど貧乏で、わたしがどれほど金持ちか、を感じさせる」と内白するように、クラリッサに、自分が国会議員リチャード・ダロウエイ夫人であり、いかに

裕福で優雅な境遇にいるかを認識させる。つまり、一種の罪悪感<sup>9)</sup>を覚えさせてしまうのである。一見 superiority complex<sup>10)</sup>の裏返しのようにみえるこの罪悪感は、キルマンに対する激しい嫌悪感に変化し、それによってクラリッサの心のベールが剥がされて、心の深みの有り様を垣間見せる。その状態が異常で危うい性質のものであるのは、既にその直前に述べられた次のような彼女の心的状態の表現から知ることができよう。

She sliced like a knife through everything ; at the same time was outside, looking on. She had a perpetual sense, as she watched the taxicabs, of being out, far out to sea and alone; she always had the feeling that it was very, very dangerous to live even one day<sup>11)</sup>

(下線筆者・以下同様)

このクラリッサの状態は、DSM-IV (精神疾患の分類と診断の手引) が、次のように定義するいわゆる「離人症性障害 (Depersonalization disorder)」<sup>12)</sup>に相当すると判断される。

- (1) 自分の精神過程または身体から遊離し、あたかも自分が外部の傍観者であるかのように感じている持続的または反復的な体験。
- (2) 離人体験の間、現実吟味は正常に保たれている。

離人体験は、単独で出現する臨床単位の場合もあるので、クラリッサをこれだけで精神を病んでいるとは断定できない。しかし、「たったひとりである感じをいつでももっている。一日でも生きることは非常に危険であるという感じが常にしていた」という感覚の持続は、明らかに彼女の精神状態が病的であると示している。クラリッサの離人症状は、彼女自身の言葉やピーターの言葉から、表面的には心臓の病気がきっかけとなって現れたとされているが、なによりも彼女の過敏な心的状態が作用していると理解される。それは、キルマンへの憎悪描写の直後

に書かれた、狂人セプティマスの病的状態 — 周囲の世界との隔絶感 — と類似していることから明らかである。

But beauty was behind a pane of glass. Even taste...had no relish to him...He looked at people outside ; happy they seemed, collecting in the middle of the street, shouting, laughing, squabbling over nothing. But he could not taste, he could not feel. In the tea-shop among the tables and the chattering waiters appalling fear came over him — he could not feel...his brain was perfect ; it must be the fault of the world than — that he could not feel.<sup>13)</sup>

離人体験は広義の外界精神、狭義の自己精神に分類されるが、クラリッサもセプティマスも、「ものを見てもそれがあるという感じがしない実在感の消失、ベールを隔てたような生き生きした印象がないという知覚界疎遠」がある外界精神の離人症である。しかし、クラリッサの場合は、「自分が存在するという感じがしない」自我意識障害のある狭義の自己精神の離人症と見なされ、一方、セプティマスは自分の身体でなくなった感覚がある身体精神の離人症と見なされるであろう。<sup>14)</sup>また両者の離人的症状、あるいは現実感消失は、かれらの言動からそれぞれ不安神経症的症状と分裂病症状とみなされる。

このような離人知覚は、ウルフ自身の体験に根差していると思われる。セプティマスの「感じがない」という言葉は、ウルフが13歳の少女時代、一家の精神的支柱であった母を失った時を回想した「A Sketch of the Past (過去のスケッチ)」<sup>15)</sup>に見られるし、また、母の死の2ヵ月後に、彼女に初めて精神病の症状が現れたという事実と併せてみると、病的な精神状態の表現と見なしてよいであろう。さらに「憎しみが魂の奥底“葉の茂る森”にのめりこみ、枝が折れるめりめりという音」というクラリッサの内面の様相の表現は、次のようなセプティマスの狂気の言語化と共通している。

... or the excitement of the elm trees rising and falling, rising and falling with all their leaves alight and the colour thinning and thickening from blue to the green of a hollow wave, like plums on horses' heads, feathers on ladies', so proudly they rose and fell, so superbly, would have sent him mad. But he would not go mad.<sup>16)</sup>

樹木をイメージとして語られるセプティマスの病態とクラリッサの精神状態との類似性は、明らかにクラリッサの精神が狂気と紙一重であることの暗示である。ウルフの小説には、人間の心のイメージを表す「水」や「波」の比喻が多いことが知られているが、樹木のイメージは、母の死後まもなく15歳の時に、母親代わりの義姉ステラが亡くなった直後の回想の中で「夏の夜の暗闇の骸骨の木」<sup>17)</sup>という表現に現れる。その後も樹木や植物はウルフ独特の生の連続性の知覚、存在の不安を表現する時の重要な比喻として頻出する。

このように見てくると、クラリッサがキルマンに対して示す度を越した罪悪感、憎悪感が発生する源は、彼女自身の心に問題がありそうである、というのは、キルマンその人というよりキルマンというタイプがクラリッサの精神の不安定、危うさを触発し、いわば深層に潜在している「存在の不安」を知覚させてしまう結果、嫌悪や憎悪が生じると考えられるからである。

したがって、キルマンが着た緑のレインコートは、不安反応を起こす「嫌悪刺激」<sup>18)</sup>として機能し、クラリッサを苦しめ、追い詰める。しかし一方で、キルマンもクラリッサを嫌い、その生き方を徹底して否定するのは、なぜであろうか。実際に彼女が登場する場面で、その心理は何に由来するかを検討することによって明らかにする。

## (2) クラリッサに「あなたは正しい」と言わせたキルマン

クラリッサはキルマンにとっても「嫌悪刺激」となる。小説中盤で、キルマンは例の「レイン

コート」を着て登場し<sup>19)</sup>、「ダロウエイ家の人々が彼女に対してしてくれた何事に対しても、彼女はそれを受ける権利を持っている」と考えている。そして、クラリッサを「あらゆる階級の中で最も値打ちのないものの一ちょっとした教養をかじっている富裕な階級の出である」と見なし、クラリッサのやからを心底から憐れみ、軽蔑している。また、クラリッサを「おばかさん、おめでたいひと」と感じる。この反感、軽蔑の感情はいったい何に由来するのであろうか。

たとえば、例の「レインコート」を着るのも「みえを飾らないためと、貧乏である」ためであるし、貧乏であるのは、大戦の最中にドイツ人の家系の生まれであるために、学校を止めざるを得なかった、と単に不運の結果と考える。また、クラリッサが小さなピンク色の顔、きゃしゃな体、みずみずしくあかぬけた様子をし、50を越して頭髮も白くなったが、隣人に「魅力的な女性だ」と思わせる軽やかさをもっているのに対して、キルマンの容姿は「かわいげのない体」「大きな手」「どんな髪形も似合わない、たまごのようにはげて白いひたい」と表現される。このような貧乏や不運や醜い身体的特徴が、彼女に inferiority feeling を覚えさせ、自分が正当に評価されていないという欲求不満をもたせることになったと推測される。それゆえ、貧乏も不運も不当だと思い、「ちょっとした教養をかじっている……クラリッサのやからを心底から憐れみ」、金持ち夫人にすぎないと軽蔑するのである。そして「熱くつらい感情、ダロウエイ夫人に対する憎しみ、世間に対する無念さが煮えたぎるときには常に彼女は神のことを考えた」のである。しかし、キルマンはおそろしく頭がよく、学士号を取得、歴史の知識は抜群である。そして、いつも自活してきたし、支持する運動のために貯蓄もしている。このように学問に打ち込む知識欲、エリザベスを愛し、教育するという行為、宗教への情熱は、彼女の inferiority complex を克服しようとするいわば「補償」<sup>20)</sup>の一形式であるとみなされる。

このように自分を過大評価し、正当に評価されていないという思いは、いわゆる妄想性(偏執性)障害に似た状態を示す。<sup>21)</sup> 数少ない登場

場面から判断するのは適切でないかもしれないが、「ダロウエイ夫人」において、あまりにもカリカチュアされて否定的に描かれているキルマンは、あるいは、家庭で教育を受けたウルフ自身の恨みの感情に由来するかもしれない。ヴィクトリア朝時代の慣習が色濃く残る当時、ヴァージニア・ウルフの家庭で男子のみが、外で教育を受け、彼女の教師は強い癩癩癖のある父、スティーヴン・レズリーと膨大な書物であったことは、ウルフに強い不満を残している。そのような教育は、結果的にウルフの作家活動に豊かなイメージの源となったのではあるが、40歳を過ぎても不満は怨念として残り、それがキルマン像に凝縮したのかもしれない。

しかし、キルマンがクラリッサと対立するのは、必ずしもこのような立場の相違から生まれる反感や嫌悪のためばかりとは言えない。キルマンを激しく動かす欲動の源は、実は人間が有する根源的な欲望としての征服欲と独占欲と考えられる。というのは、彼女の心の底にあるのは、クラリッサを「征服し、彼女の仮面をはぎとりたい圧倒的な願い」であり、「この女を泣かせ、滅亡させ、へり下らせ、ひざまずいて『あなたは正しい』と叫ばせたい」<sup>22)</sup>征服欲であるし、そして、エリザベスを愛するのは、クラリッサが大切に保護しようとしている存在を奪うことで優位に立ちたいという独占欲からである。

クラリッサの夫、リチャード・ダロウエイをして、「頭がよくて、実に歴史的な頭をしている」<sup>23)</sup>と言わせる学士号に裏付けられた知識、また宗教的な愛の裏には、基本的な欲求がうごめいており、クラリッサに対する反発も、欲求が阻止され不満が攻撃という形に現れたと言える。これみよがしに年中着続け、クラリッサを苛立たせるレインコートは、貧乏のためというよりも、征服欲という基本的欲求が充足されないために生じる固着<sup>24)</sup>としての卑屈さ、恨みがましき、無神経さの表れであるとも言えよう。

キルマンがこのような基本的欲求に囚われた女性であると最もよく理解できるのは、エリザベスとデパートでお茶を頂く場面である。

Elizabeth rather wondered whether

Miss Kilman could be hungry. It was her way of eating, eating with intensity, then looking, again and again, at a plate of sugar cakes on the table next to them ; then, when a lady and a child sat down and the child took the cake, could Miss Kilman really mind it? Yes, Miss Kilman did mind it. She had wanted that cake — the pink one. The pleasure of eating was almost the only pure pleasure left her, and then to be baffled even in that !<sup>25)</sup>

彼女の食べ方、ほかの人のケーキにまで心を奪われる食欲は、明らかに生理的欲求としての食欲がそのまま現れたものである。その食欲は摂食障害とまでは言えなくても、決して正常ではない様子を見せている。その異常さがエリザベスに、「なんだか少し無味乾燥だわ」と感じさせ、何とか引き留めようとするキルマンの努力にも拘わらず、その場から立ち去りたい気持ちにさせてしまう。つぎのようなキルマンの状態に、エリザベスへの愛情が、基本的欲求である食欲と同じレベルの欲望に過ぎないことがよく表れている。

She was about split asunder, she felt. The agony so terrific. If she could grasp her, if she could clasp her, if she could make her hers absolutely and for ever and then die; that was all she wanted, to sit here, unable to think of anything to say; to see Elizabeth turning against her; to be felt repulsive even by her — it was too much; she could not stand it. The thick fingers curled inwards.<sup>26)</sup>

しかし、クラリッサも基本的な欲望 — 独占欲 — から解放されているわけではない。小説冒頭でキルマンを想起したのはエリザベスに付随してであったし、娘をめぐるキルマンとの張り合いは、突然の衝動で、激しい苦痛と共に、「この女は娘をとっていってしまうのだったから — …」<sup>27)</sup>

というほどクラリッサを圧倒する。昔の求愛者ピーターに「わたしのエリザベスですよ」<sup>28)</sup>と紹介して、何度も訝しく思わせる母娘の関係は、エレクトラ・コンプレックス<sup>29)</sup>に由来すると考えられなくもない。しかし、ほとんどと言ってよいほど、キルマンと関連してエリザベスが登場することを考えると、キルマンと張り合う征服欲のひとつの形の独占欲である、と見なした方が自然ではないだろうか。このように両者共に基本的欲求としての征服欲を有するとは言うものの、クラリッサはキルマンとは違ったありかたを示す。彼女は、6月の中頃のさわやかなロンドンの空、ポンド・ストリートや公園に魅了され、朝の大気をからだ一杯満喫している。その感覚は、「自分がいなくなっても、これらはすべて存続していくだろう。…このロンドンの通りに、ものごとの消長に、ここそこに、なんとかわたしは生き続け、ピーターも生き続けるのだ。」<sup>30)</sup>という、生から死への連続の可能性へとつながっていく。ウルフはその可能性を、クラリッサに“moment of being”（存在の瞬間）という独特の時間体験させることで実現しようとする。

Big Ben struck the half-hour. How extraordinary it was, strange, yes, touching to see old lady (they had been neighbours ever so many years) move away from the window, as if she were attached to that sound, that string. Gigantic as it was, it has something to do with her. Down down, into the midst of ordinary things the finger fell, making the moment solemn. She was forced, so Clarissa imagined, by that sound, to move, to go… that's the miracle, that's the mystery; that old lady, she meant, whom she could see going from chest of drawers to dressing-table… was simply this : here was one room; there another. Did religion solve that, or love?<sup>31)</sup>

「ここに一つの部屋があり、あそこにもうひと

つ部屋があるということ」は、瞬間が次の瞬間に連続することで可能になる。そうして自己は他者に、世界に続き、人は人に、人の住む部屋は次の部屋に、人の生は死へ連続し、存在の不安は克服される。このように存在の瞬間を生きることの意味を見いだすクラリッサは、キルマンの苦悩が日常の基本的欲望の域に留まっているのと対照的に、非日常の精神の領域で自己実現の可能性を見出すのである。

### (3) クラリッサはなぜパーティを成功させたいのか

クラリッサとキルマンがお互いに覚える嫌悪、反目、憎悪は、社会的立場の相違に起因するばかりでなく、異常な精神的要素が関連していることを考察してきた。しかし、クラリッサがキルマンの基本的欲求の異常を共有し、セプティマスの病的状態と類似性をもつとは言うものの、かれらと決定的に異なるのは、彼女が存在の瞬間を体と心で感覚できることである。そして、彼女は「エリザベスやキルマンのことは事実の世界に属する」<sup>32)</sup>と気がつき、非現実の世界に対して独特の関心を示すのである。

All the same, that one day should follow another; Wednesday, Thursday, Friday, Saturday; that one should wake up in the morning; see sky; walk in the park; meet Hugh Whitbread; then suddenly in came Peter; then these roses; was enough. After that, how unbelievable death was! — that it must end; and no one in the whole world would know how she had loved it all; how, every instant …<sup>33)</sup>

キルマンとは対照的に、クラリッサにとって人生とは、存在の瞬間を生きることの意味した。瞬間が次の瞬間に続くこと、つまり時の連続性に裏づけられて“生の連続性”が確信される。逆に言えば、彼女は、生の連続性が脅かされることで、生に亀裂が生じることを恐れたのである。それゆえ、時間はクラリッサに特別な意味をもつのである。

…she had a sudden spasm, …She was not old yet. She had just broken into her fifty-second year. Months and months of it were still untouched. …Clarissa (crossing to the dressing-table) plunged into the very heart of the moment, transfixed it, there — the moment of this June morning on which was the pressure of all the other mornings, seeing the glass, the dressing-table, and all the bottles afresh, collecting the whole of her at one point (as she looked into the glass), seeing the delicate pink face of the woman who was that very night to give a party of Clarissa Dalloway ; of herself.<sup>34)</sup>

クラリッサは老いていくことに恐怖をおぼえているのではない。まだ残っている時間が隔絶することなく連続するか、と不安を感じているのだ。「存在の不安」とも言うべき性質の不安は、現実の世界と非現実の世界との乖離から生まれる。彼女が生連続性に希望を抱くのは、現実世界に属する存在と非現実世界における存在とが乖離する恐怖を知っているからである。クラリッサが「自分はナイフのように何でも切り落として行く」と言うとき、人や世界との隔絶感が、時間に於ける時間と時間の亀裂の知覚という、彼女の独特の時間体験をも生じる。ここでも生々しい分裂病的描写に見られるセプティマスの病態と、クラリッサとの共通性を指摘することができよう。

このようなクラリッサの意識に生まれる“生の連続”の可能性と、それを脅かす不安との葛藤は、ストーリーを通じて交互に描かれ、自殺念慮に捕らわれる狂人セプティマスと、生の瞬間を感得するクラリッサと二つの方向性が示される。セプティマスは、地獄に落ちていくように、その現実と非現実の精神との生き生きとした接触を喪失したが、クラリッサはふたつの世界を統合し、その均衡を得ながら生きていこうとする。そのような可能性は、キルマンがエリザベスと出掛けた直後、議会の大時計が午後3時半を打ち、その瞬間をおごそかなものとし、

下へ下へと日常的なものの真っ只中へおちていった時、突然のように彼女の意識に定着したのであった。彼女は、向いの窓に老婦人が議会の大時計の音を聞いて、窓を離れ次の部屋へ消えていく姿を見た時、「時の流れ」の中に、瞬間が日常にくさびを打ち、次の瞬間へとつらなる生の連続をくみとったのである。したがって、彼女がパーティを開くのは、ピーターが言うように「手短かに言えば単なるスノブ」<sup>35)</sup>のためでも、夫リチャードが考えるように「心臓が悪いのにお祭りさわぎを好む馬鹿」<sup>36)</sup>なためでもない。生の瞬間をつなぐため、生が連続するため、少女時代のブアトンからロンドンへ、51歳から52歳へ、生から死へと連続するためであった。彼女がパーティを成功させたいのは、自分の存在が人と人をつなぎ、人と人、自分と人との過去と現在をつなぎ、生と死をつなぐ時の瞬間を実感するためであった。そのことによって、精神の深みに潜む存在の不安を克服し、日常と非日常の均衡の中で生きることが可能となる。クラリッサが「パーティを開くのは、人生のため」<sup>37)</sup>という人生とはこのようなものであった。しかし、クラリッサの心の中では、キルマンに具現される日常という事実の世界と非日常、非現実の世界の乖離が続き、存在の不安、ひいては死の不安は内在されたままである。ピーターの言葉を借りれば、クラリッサは「総理に付き添い、部屋を堂々と歩き、…その天分—そこに厳然と存在し、通り過ぎながらすべてをまとめ上げてしまう天分をいまだもっていた」<sup>38)</sup>にもかかわらず彼女はキルマンを再び想起したのは、パーティが順調に進んでいく中で、外観や成功に潜んでいる一種の空虚さを感じとった直後であった。

…yes, but after all it was what other people felt, that; for, though she loved it and tingle and sting, still these semblances, these triumphs (dear old Peter, for example, thinking her so brilliant), had a hollowness; <sup>39)</sup>

クラリッサの内部で日常と非日常が、現実と非現実がつながり、精神の異常と正常が均衡を

保たれてやすらぎが訪れたのは、狂人セプティマスの自殺のニュースを、パーティに遅れてきた医師ブラッドショーから聞いた時である。

…Death was an attempt to communicate, people feeling the impossibility of reaching the centre which, mystically, evaded them; closeness drew apart; rapture faded; one was alone. There was an embrace in death.<sup>40)</sup>

このとき初めてクラリッサに、死には抱擁があると認識され、死は恐れるものではないという確信が定着する。実際に起きたセプティマスの自殺は、クラリッサの精神の中で追体験され、彼女は内包する狂気を、死の不安を克服したのである。それは、クラリッサのパーティの成功も意味したのであった。

#### (5) 結び—クラリッサにおける正常と狂気の共存の実現

これまで、クラリッサとミス・キルマンとが相互に抱く嫌悪感に焦点をあてて、それぞれの心的状態を考察してきた。かれらの嫌悪感は、富裕な国会議員の妻と貧乏な独身の家庭教師という立場の相違、あるいは美しさと醜さというようような表層的相違による complex feeling や罪悪感から生じているように見えながら、実はもっと深奥に潜む根源的な欲求に由来することが明らかになった。また、クラリッサのもつ存在の不安が浮かびあがり、狂人セプティマスと類似した心的状態が露にされた。

しかしながら、キルマンが、出世欲、食欲、独占欲といった基本的欲求に囚われたままであるのに比して、クラリッサは存在の瞬間を実感することで、彼女の不安を触発するキルマンをも克服する。パーティーの最中、キルマンを想起した謎のようなことば「クラリッサは彼女(キルマン)を憎んだ。彼女を愛した。」<sup>41)</sup>は、少なくとも、キルマンを受容したことを意味する。あるいは、キルマンをクラリッサの分身と見なせば、彼女は自らの中のキルマン的要素を理解し、嫌悪を克服したと言えよう。



ウルフが直面した「深淵」とは、時間に支配されない、現実の世界の秩序も存在しない、したがって、正常とか異常とかの区別がない精神の深みを意味したと思われる。ウルフには、非現実とは逆説的な意味で現実であったのだ。しかしウルフにとって狂気を作品に書くことは、決して生易しいことではなかった。執筆がかなり進んだ1924年9月に記した、「狂気のところを読むのが恐い、と告白しないわけにはいかない」<sup>42)</sup>という言葉から、ウルフの精神状態と狂気の描写との関連が理解できる。ウルフ自身の病状が、止むことなく絶えず小刻みに繰り返したことは知られている。「ダロウェイ夫人」執筆中も何度も筆を休めなければならない時があったのである。とはいうものの、ウルフが自ら「この本はある意味で一つのはなれわざといえる。病気による中断なしに書き終えた、というのは例外的な事実なのだ」<sup>43)</sup>と言うように、この期間は大きな病期から離れて、病状が比較的安定していた

ことが、狂気というテーマを書くことを可能にしたのであろう。

ウルフは、クラリッサに存在の瞬間を確信させることで、正常と異常の微妙なバランス、つまり、ホメオスタシスを保つ可能性を現し、精神の深淵そのものを言語化することで、その上の一すじの舗道を歩き始めたのではなからうか。それは、ウルフが精神を病むがゆえの鋭敏さと洞察力を備えていたばかりでなく、内面を客観化する書くという行為には不可欠の、極めて正常な判断力と才能を持ち併せていたからだと言えよう。

このように、「ダロウェイ夫人」の独自性は、狂気を排除することなく正常との共存の可能性を表したことにある。しかしこのことについては、さらにほかの登場人物、特に狂人セプティマスと彼女の病跡と関連づけながら、把握しなければなるまい。

#### notes

- 1) Woolf V (1873) Edited by Anne Oliver Bell, Assited by Andrew McNeille, *The Diary of Virginia Woolf Volume Two* 1920–1924. A Harvest Book Harcourt Brace & Company, London, p72.
- 2) Woolf V *Mrs Dalloway* (1925) は Hogarth Press から出版されたが、本稿の引用は A Triad Grafton Book, London Glasgow (1988) を使用する。また、文中訳は、近藤いねこ訳「ヴァージニア・ウルフ全集 3 ダロウェイ夫人」(1994. みすず書房) を用いる。
- 3) Woolf の病気の同定については研究者によって判断が異なっている。これについては、ウルフの精神的錯乱は生涯に4回ないしは5回起きたとされており、それを夫君レナード・ウルフは躁鬱病であるとし、リヴァール大学精神医学教授 F・フィッシュは循環気質(躁鬱質)と見ている。ウルフの病跡学研究を目指した神谷美恵子は循環性要素と分裂病性の双方の要素を示しているとして、いわゆる「非定形性」精神病に属しているとは見なしている。最近では、T. C. Caramagno が躁鬱病という観点から *The Flight of the Mind* (1992) を著している。
- 4) 病跡学あるいはパトグラフィー (pathographie) は、ギリシャ・ローマ時代にその源流を求めることである。それは、精神医学の分野から狂気と天才の創造過程の研究が主として行われ、独立した学問として研究が始まったのは、19世紀末期から20世紀初頭にかけてである。しかし近年、病跡学に対して、精神医学者あるいは精神病理学者という医学の専門家に留まらず、文学、政治、思想などの関連諸領域の専門家に関心をもたれるようになっていく。ということは、とりもなおさず文学の病跡学的研究は、その作者の病んだ精神のみの解明を意図するのではなく、狂気(異常)をその人の一部であると見なし、精神の病いがその人格の基盤の重要な要素であると見る、人間誌 (Anthropography) の研究であることが示されている。それは天才の正常な、と同時に異常(病的)な側面を、本人が気付かない無意識の心理作用を含めて、精神と肉体の両面から全体的に観察し、記述し、研究し、考察することを課題としている。福島 章著：天才の精神分析；新曜社、参照。

- 5) Woolf V *The Diary of Virginia Woolf Volume Two* 1920—1924 (前記1). p207.
- 6) *Ibid.*, p243.
- 7) Woolf V (1988) *Mrs Dalloway*. A Triad Grafton Book, London Glasgow, pp12—13.
- 8) *Ibid.*, p12, 106, 109, 112.
- 9) ラブランシェ・ポンタリス, 村上 仁監訳 (1990) 精神分析用語辞典. みすず書房には, 「主体が非難されて当然だと考えるような行為をなしたとき…、その結果おこる情動の状態や、あるいは、その故に主体が自己を責めねばならないような行為とは関係なく、自分は無価値な人間だと思う漠然とした感情をさす」と説明されている。クラリッサの罪悪感も、対象(キルマン)に向けられる非難が自分に向けて反転した、自己卑下、自己非難という感情に類似していると考えられる。ほかに、東洋, 大山 正, 詫摩武俊, 藤永 保他編集代表 (1980) 心理用語の基礎知識. 有斐閣, 東京, p.192. 新福尚武 (1991) 精神医学大事典. 講談社には, 狭義の説明がある。
- 10) ラブランシェ・ポンタリス, 村上 仁監訳, 精神分析用語辞典 (前記9), pp147—148では, 「コンプレックスという用語は、……精神分析学者の間では, エディプス・コンプレックスと去勢コンプレックスを除けば, しだいに好まれない用語になっている」と説明し, 用語の意味を三つに区別している。本稿では, その2. 「一般的な意味で, 人格的特性 (もっともよく統一されたものを含む) の多かれ少なかれ組織化されたもの全体を指す」をいう意味での用語として用いる。
- 11) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p9.
- 12) 高橋三郎, 大野 祐, 染谷俊幸訳 (1995) DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引. 初版, 医学書院, 東京, pp186—187.
- 13) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p112.
- 13) 心理用語の基礎知識 (前記9). pp365—367. 精神医学大辞典 (前記9). pp877—878.
- 15) Woolf V (1976) edited with an Introduction and Notes by Jeanne Schulkind, *Moment of Being Unpublished Autobiographical Writing*. The University Press, Sussex, pp61—138.
- 16) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p21.
- 17) Woolf V *Moment of Being* (前記15). pp139—198.
- 18) 心理用語の基礎知識 (前記9). p125. 「オペラント条件づけで, 特定の反応の生起に依存して与えられる嫌悪刺激は反応の後で強化が生ずる」と説明されている。キルマンは同様の反応をクラリッサに与えるという意味で, クラリッサにとっては嫌悪刺激として機能する。
- 19) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). pp109—112.
- 20) 心理用語の基礎知識 (前記9). p351, 389, 421. 精神医学大辞典 (前記9). p791.
- 21) DSM-III-R 精神分析の分類と診断の手引 (前記12). pp105—106.
- 22) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p12.
- 23) *Ibid.*, p612.
- 24) 精神医学大辞典 (前記9). pp871—872. によれば, 欲求には一次欲求と二次欲求があり, 地位や名誉の欲求, 金銭や権力の欲求など, 社会集団の中で自己の位置を保持し尊敬を得ようとするのは後者である。それが実現されない場合, 欲求不満が生じるが, 欲求不満—固着という処理の仕方もあると考えられている。
- 25) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p116.
- 26) *Ibid.*, p117.
- 27) *Ibid.*, p112.
- 28) *Ibid.*, p44.
- 29) Elizabeth Abel (1989) *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis*. The University of Chicago Press, p30—44. では, クラリッサと娘エリザベスとの関係をエレクトラ・コンプレックスとみなして論述している。

- 30) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p10.
- 31) *Ibid.*, p113—114.
- 32) *Ibid.*, p108.
- 33) *Ibid.*, p109.
- 34) *Ibid.*, p34.
- 35) *Ibid.*, p108.
- 36) *Ibid.*, p108.
- 37) *Ibid.*, p108.
- 38) *Ibid.*, p154.
- 39) *Ibid.*, p154—155.
- 40) *Ibid.*, p163.
- 41) *Ibid.*, p155.
- 42) Woolf V *The Diary of Virginia Woolf* (前記1).
- 43) *Ibid.*, p312.
- 44) Woolf V *Mrs Dalloway* (前記7). p155.